

2017 年 11 月 5 日（日）「審きの基準 ～地引網の譬～」

マタイ 13:47-50

47 また、天の御国は、海におろしてあらゆる種類の魚を集める地引き網のようなものです。
48 網がいっぱいになると岸に引き上げ、すわり込んで、良いものは器に入れ、悪いものは捨て
てるのです。49 この世の終わりにもそのようになります。御使いたちが来て、正しい者の中
から悪い者をえり分け、50 火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ざしりする
のです。

【序論】

マタイ福音書 13 章の「7つの譬」も最後の一つとなりました。今日は「地引網の譬」
を学びます。この譬を一読してみて気づかされるのは、先に学んだ「毒麦の譬」
(13:24-30/36-43) とそっくりだということです。その内容とは、今の世にあっては「良
いもの」と「悪いもの」が渾然一体となっているが、終わりの日にはそれらが選り分け
られるということ。この真理は、やがて学ぶことになる 25 章の「羊と山羊の譬」とも
類似しています。ここでも、やはり終わりの日に「正しい者」と「悪い者」が選り分け
られることが明らかにされています。これら一連の譬話から言えることは、主イエスが
世の終わりの審きについて、様々な場面で弟子たちに語っておられたということです。
たまたまフツと湧いてきた話ではなく、常に主イエスの念頭にあり、弟子たち（また全
世界）への何らかの警告として伝え続けた事柄に違いありません。世の終わり（また自
分の人生の終わり）について考えることは、現在の生き方を変えます。

キリスト者は一面、この譬話を安心して読むことができるのかも知れません。それは、
既に恵みによって救われているのであれば、審きの日に「罪赦された者」として主の御
前に立つと約束されているからです。しかしながら、私自身はこの種の譬話を読む時、
不安が拭い切れないのです。それは心のどこかで、「私は本当にここで言われている『良
い者』であるのか？」という微かな警鐘^{かす}が鳴り響いているからでしょう。今現在キリス
トを信じている人も、実際に神の審きの前に立たされる時、もし「悪い者」と判断され
たら……という不安を抱いているのではないか。それは、最終的な神の判断がなされる
時、人は無力だからです。今日の譬話によると、終わりの日には御使いに何らかの判断
基準が与えられて、神の目に適う存在であるか否かを見分ける役目を担うようです。私
たちが知らなくてはならないのはこの「判断基準」でしょう。

【本論】

本論 1. 地引網の性質

また、天の御国は、海におろしてあらゆる種類の魚を集める地引き網のようなものです。網がいっぱいになると岸に引き上げ、すわり込んで、良いものは器に入れ、悪いものは捨てるのです。(13:47-48)

ここでは「神の国」が「地引網」に譬えられています。地引網の経験がある人は少ないかも知れません。日本では九十九里浜が（海底に岩が隠れていないため）地引網に適した名所と言われています。この土地の地引網は、1555年に紀州の漁師西之宮久助そりがねが剃金村（現在の千葉県白子町）に漂着し、紀州漁法である地引網を伝えたことによって始まったそうです。基本的なやり方は、陸岸を拠点にして海の沖合に網を張り廻し、網の両端に付けた引網を引いて浜辺に引き揚げるというものです。二艘の網船が沖合に出て行なう「大地引網」は、その長さが片側で300間（約545m）、中央部に30～40間（約70m）の大袋網が付いている巨大なものでした。この漁法は大規模であるだけに、水主60～70人、岡者200人という多くの労働力を必要としたそうです（Wikipediaより）。

パレスチナにおいても基本的な方法は同じです。主イエスの弟子の中には漁師が含まれていましたので、このような話は馴染み深かったことでしょう。この漁法の大きな特徴は、海（または湖）のありとあらゆる生き物を（ゴミも）一緒くたに引き揚げってしまうことです。選別は後から行なう。食べられそうなものを残し、食用に適さないものは捨てていきます。

「網」とは、全人類を治めておられる神の支配。言い換えるならば、教会を通してなされる福音宣教が遍く全世界に拡大することを言い表しているでしょう。「網がいっぱいになる」とは、福音宣教が世界中に及んだ時、いよいよ世の終わりの刈り入れの段階に入ることです。このことが「地引網」に譬えられるということはつまり、神は人類全体を「良いもの」「悪いもの」の区別なく、一旦ひとまとめに引き揚げてしまわれるということ。そして、魚を一匹ずつ査定するように人間が選別されていくのです。

本論 2. 最後の審判

この世の終わりにもそのようになります。御使いたちが来て、正しい者の中から悪い者をえり分け、火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ざしりするのです。

(13:49-50)

この選別こそ「最後の審判」です。御使いにその権限が与えられ、彼らは一つの基準をもって判断していきます。その基準とは、黙示録の表現で言うと、額に印を押されているかどうか（7:3-4）です。パウロの表現では、キリストを着ているかどうか（ローマ 13:14、Ⅱコリント 5:2-4、エペソ 4:2、コロサイ 3:10）。尚、この表現はヨハネの黙示録でも多く用いられています（3:4-5, 18, 4:4, 6:11, 7:9, 13, 14, 16:15, 19:8, 22:14）。つまり、与えられた地上の生涯において、キリストを信じ、神のものとしての証印を押されたかどうかが決定的な判断基準となるのです。

しかし難しいのは、この証印が私たちの目には見えないということ。誰が真に救われているかは、人間には判断できないのです。実際、難解な問題があります。まず、誰の目にも善良な人が、神の審きの前には「悪いもの」と判断されてしまう可能性があるということ。世の中を見渡すと、素晴らしい人柄で、慈善事業を行なっているたくさんの人がおられます。人間の思いとしては、それらの人々が「良いもの」として永遠の安息に入れていただけることを願うものです。しかし、神の基準とはそういうところにはないということが、福音書を読むとはっきりと分かるのです。典型的な例として、神の律法に忠実に歩もうとしていたパリサイ人や律法学者が挙げられます。彼らは厳格に旧約聖書の律法を守り、それに連なるおびたしい伝承に従って生きていました。しかし、主イエスが彼らに向けて発せられる言葉の辛辣さは、審きの宣言そのもののなのです。

一方、誰の目にも「悪」と映る人々もいた。遊女、取税人、罪人と呼ばれる人々であります。彼らはその倫理的な不潔さゆえに、人々から忌み嫌われていました。ところが、救いの必要性をいち早く嗅ぎ分けたのは、これらの人々だったのです。倫理的に正しくある人々が救いに入りにくく、反対に、己の罪を知り、神の審きを身近に感じている人々がイエスの救いを真っ先に求めてしまう。神の国の原理はこのようなパラドックスを引き起こします。

マタイ福音書では「良いもの」と呼ばれる人々が、別の表現で「最も小さき者」「貧しい者」と呼ばれています。彼らは自分の欠点を深く認識しており、神の恵みに懸命に依り頼む。この心のあるなしが、神の判断基準なのです。反対に「悪いもの」とは、悔い改めなく、神の赦しを見出さなかった人、救いを拒んだ人のことを言います。

更に別の言い方をしてみましょう。それは、イエスを愛する者であるかどうかです。この方を自分の救い主として愛し、お会いできる日を今か今かと切望している人のこと。自分の罪を知れば知るほど、主イエスの救いが自分に不可欠であることを認めるのです。

以前にも紹介させていただいたことがあります。C. S. ルイスの『ナルニア国物語』の最終巻である『さいごの戦い』の中に、最後の審判を思わせる場面が出てきます。印象深いのでご紹介致します。

生きものたちが、星々の立っている方へ近づくにしたがって、その目はいよいよ強くかがやきました。けれども生きものたちが、アスランのところまでくると、そのものたちに二つのうちいずれかのしわけができてきたのです。さしかかった生きものたちは、アスランの顔をまっすぐにながめました。おのずからふりあおがなければならないようになっていたのでしょう。そしてなかには、アスランをながめて、表情がさっとはげしく変わるものがあります。それはおそれとにくしみの表情でした。それでも、ものいう動物の顔にうかぶ、おそれとにくしみの色は、ほんのちらりとしかつづきませんでした。見ているまに、そういう動物たちは、ふっとものいうけものでなくなって、ごくふつうのけものになってしまうのです。こういう表情をしてアスランをながめた生きものたちは、右の方に、つまりアスランの左がわに道をそれて、戸口の左に落としているアスランの大きな黒い影のなかにはいつて、みえなくなっていました。子どもたちは、もうその連中を二度と見かけませんでした。(pp. 236-237)

ファンタジックな作品の中に、見事な審きの描写があります。アスランがキリストを表すのであれば、審きの時にキリストに対する人間の真の思いが明らかにされるということでしょう。キリストへの愛を持っているかどうか、これが判断基準の別の角度から見た言い方であります。

本論 3. 自らの信仰を問う

ここまで来ますと、最後にキリスト者自身の心が問われてくるでしょう。大きな網の中には、「キリスト者」を名乗る者の中に、真に救われている者とそうでない者とが混じり合っているとも言える。その信仰告白が真実であるかどうか、今一度私たちに問われてくるのです。これは考えてみると恐ろしいことです。私たちが地上の生涯において、毎週口にしてきた「主の祈り」「使徒信条」、また日々の祈りの言葉が本物であったかどうか、終わりの日に神の御前に明らかにされるからです。形だけのクリスチャンではないか。形式だけの礼拝者となっていないか。いつの間にか、自分の信仰を誇り、他人を見下げるような者となっていないか。私たちが日頃考えていること、行なっていることは、神に喜ばれるものであるだろうか。キリストの教えを喜び、本当にそれにふさわしく変えられたいと願っているだろうか。御言葉に逆らいたい思いに満ちてはいないだろうか。

一つ一つ自分自身に問うていきます時に、自分が多くの面でふさわしい人間ではないことを知るでしょう。これは苦しいことです。ところが、不思議なことに原点はここに

あるのです。私たちがそのように自らに絶望している時にこそ、「遊女」「取税人」「罪人」「最も小さい者」「貧しい者」の心になっているのです。そして、主イエスの救いを真に求め、この方が豊かに与えて下さる罪の赦しを喜び、顔と顔とを合わせて相見える日を心待ちにするはずです。畏れつつ、御顔の光を仰ぎ見るのです。そこにはどんなに深い感動があるのでしょうか。私の救い主とお会いできるのですから。

実は、この説教を書きながら、私自身が追い込まれていきました。御言葉によって逃げ道が塞がれていくのです。神の審きを恐れる自分がいることに気づきます。しかし、キリスト者はそれで終わりではありません。恐れ（と憎しみ）で終わる存在ではなく、そこから新たに開ける救いの道へと向かうのです。この、絶望と平安の背中合わせになった状態が、きっと神の御前にふさわしいあり方なのでしょう。

【結論】

今日は「地引網の譬」を突っ込んで学びました。実は、この譬話は私にとって思い出深い箇所なのです。私が神学生だった最終学年の2007年11月19日に提出した新約神学のレポートで、この譬話からの説教を書きました。懸命に作成したレポートに、指導の先生がたくさん赤線を引いてコメントを書き入れて下さいました。その全体としてのコメントに「よくできています。福音がしっかり語られていると思います。いわゆる『善良で正しい人』が聞いた時、『主よ、あわれんでください』まで持っていけるかは大きな課題ですね」と書かれていました。

この譬話の焦点は「良い者」にではなく「悪い者」の方にあります。審きが明確に語られなければ、人は悔い改めに至ることができないのです。そして、その恐れに向こう側に、救いの輝きがあります。自らを「悪い者」と認めるところに、救いを求めることができる。へりくだった者の祈りを神が聞き逃されることはありません。

【祈り】

憐れみ深い神よ。厳しい御言葉でした。最後の審判について語ることも、聞くことも、私たちにとっては恐ろしいことです。私たちは信仰者としての誤解に陥る危険性を常に持っています。いつしか自分が「正しい者」になってしまい、御前に高ぶった心で歩んでいるのです。今、真に自己吟味をし、御前にへりくだります。願わくは、私たちに、終わりの日にも主イエスへの愛の眼差しを向けさせて下さい。この地上にあって、主の愛に捉えられ、主を心から愛する者であり続けることができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

地引網を広げるが如く、全世界に遍く福音を宣べ伝え給う、父なる神の愛。

終わりの日の審きを担い、依り頼む者を永遠の御国へと招き入れ給う、主イエス・キリストの恵み。

信者の額の証印そのものとなり、神の目に「正しい者」とならせ給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。